

## 定山溪シンポジウムを振り返って

将来計画専門委員会では現在、昨秋に提出した中間報告に対するご意見・ご批判を仰いでいる。その一環として本年1月に定山溪シンポジウムを開催した。中間報告では、今後のわが国の惑星科学の研究と教育において重要と考えられる問題、すなわち「月惑星探査」、隕石研究を中心とする「惑星物質科学の研究の今後」、および「研究教育ネットワーク」についての提言が議論されている。これらは本来独立な問題ではなく、相互に関連した複雑な問題であるため、将来計画専門委員会においても最終報告の作成に向けて頭を悩ませている。

特に研究ネットワークは他の2つの問題と密接に関係しているとともに、その構築にあたって従来にない新しい概念を求めている。研究ネットワークは今後のわが国の惑星科学の研究体制に大きな影響を与える可能性があるため、再度、中間報告をご検討のうえ、会員の皆様からのご意見と具体案を多数お寄せいただきたい。

上記の定山溪シンポジウムでは「月惑星探査」に主眼が置かれた。シンポジウムでは、宇宙研において探査計画に携わっている現場の若手研究者や大学や企業の研究者を交えて活発な議論が闘わされた。そこでの講演と議論の要約を本号をお借りして報告した。第一線の研究者が多数参加され、通常の学会や研究会では聞けない側面の話が聞ける絶好の機会であったにもかかわらず、次代の研究を担う大学院生の参加が少なかったのは残念であった。

シンポジウムでは熱心な議論が行われたが、個人的な率直な感想として、時として議論が具体性に欠け観念論に走る傾向があるように感じた。中間報告に対しても、月惑星探査における技術面の議論が軽視されているとのご批判をいただいている。わが国の従来の惑星科学研究では、個人または小グループ規模の研究がほとんどであったところに、黒船到来のように、急速にビッグサイエンスの要素が入ってきたため、国内の多くの研究者はそれぞれの事情に応じて、対処に戸惑っているのではないだろうか。惑星科学の多様性を反映して、近接の宇宙科学、たとえば磁気圏プラズマ科学やX線天文学の研究とは異なり、宇宙空間に出て行う観測が無くても地上の実験室において、それなりに研究ができてきた点も、黒船到来とを感じる研究者が多い一因と思われる。

しかし一方、アメリカや旧ソ連が中心となって行なってきたこれまでの月惑星探査の成果によって、惑星科学の研究が飛躍的に発展したことは明白である。われわれの多くも研究・教育の両面で、この成果の多大な恩恵を受けている。わが国の惑星科学者の多くも、

米ソの月惑星探査の成果を用いた論文を書き、探査の最新結果やそれにもとづいた研究成果が発表される種々の国際会議にも参加してきた。

現状では種々の問題を抱えてはいるものの、わが国においても、独自の月惑星探査を計画・実行できる状況が実現しつつあることは事実である。わが国の惑星科学も探査という強力な新しい手法を独自に獲得できる段階に達しつつある。現状の問題を避けたり、先送りすることなく、現時点でそれぞれの立場から問題の解決に努力することによって、早急に環境を整備しつつ、独自の探査計画を実行することのできる機会を拡げてゆく必要がある。われわれは、米ソの探査成果のユーザーやディーラーであるだけでなく、受けてきた恩恵相応の生産を行うメーカーとなるべき時期に来ているのではないだろうか？

山本哲生（北海道大学理学研究科）